

風疹 Q&A

風疹（ふうしん）と先天性風疹症候群について

- 風疹とはどんな病気ですか？

答え：風疹ウイルスによっておこる急性の発疹性感染症で、流行は春先から初夏にかけて多くみられます。潜伏期間は2－3週間（平均16－18日）で、主な症状として発疹、発熱、リンパ節の腫れが認められます。ウイルスに感染しても明らかな症状がでないまま免疫ができてしまう（不顕性感染）人が15－30％程度いるようです。一度かかると、大部分の人は生涯風疹にかかることはありません。集団生活にはいる1－9歳ころ（1－4歳児と小学校の低学年）に多く発生をみています。風疹ウイルスは患者さんの飛まつ（唾液のしぶき）などによってほかの人にうつります。発疹のでる2－3日まえから発疹がでたあとの5日くらいまでの患者さんは感染力があると考えられています。感染力は、麻疹（はしか）や水痘（水ぼうそう）ほどは強くありません。

風疹の症状は子供では比較的軽いのですが、まれに脳炎、血小板減少性紫斑病などの合併症が、2,000人から5,000人に一人くらいの割合で発生することがあります。その点では軽視できない病気です。また、大人がかかると、発熱や発疹の期間が子供に比べて長く、関節痛がひどいことが多いとされています。一週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

参考：感染症の話（IDWR2001年29週）

http://idsc.nih.gov/idwr/kansen/k01_g2/k01_29/k01_29.html

- 先天性風疹症候群とはどんな病気ですか？

妊婦とくに、妊娠初期の女性が風疹にかかると、胎児が風疹ウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達の遅れ等の障害をもった赤ちゃんが生まれる可能性があります。これらの障害を先天性風疹症候群といいます。先天性風疹症候群をもった赤ちゃんがこれらすべての障害をもつとは限らず、これらの障害のうちの一つか二つのみを持つ場合もあり、気づかれるまでに時間がかかることもあります。

先天性風疹症候群がおこる可能性は、風疹にかかった妊娠時期により違いがあります。特に妊娠初めの12週までにその可能性が高いことが認められており、調査によって25－90％と幅があります。予防接種をうけることによって、成人女性なら妊娠中に風疹にか

かることを予防し、または妊婦以外の方が妊婦などに風疹をうつすことを予防できます。
(ただし妊娠中は風疹の予防接種を受けることはできません)

参考：感染症の話（IDWR 2002年21週）

http://idsc.nih.gov/idwr/kansen/k02_g1/k02_21/k02_21.html

- 日本の風疹の流行の現状はどうなっていますか？

答え：かつてはほぼ5年ごとの周期で、大きな流行が発生していましたが、1994年（平成6年）以降は大流行はみられていません。しかし、局地的流行や小流行はみられており、予防接種を受けていない場合、発症の可能性は少なくありません。特に2002年（平成14年）からは局地的な流行がつづいて報告されており、2003年から2004年には流行地域の数はさらに増加し、2005年にも流行が続くことが懸念されています。

予防接種とスケジュールについて

- 風疹ワクチンとはどんなものですか。

答え：弱毒化を行った種^{たね}ウイルス（弱毒株ウイルス）を培養・増殖させ、凍結乾燥したものです。弱毒株ウイルスを接種した場合、通常の風疹感染と違ってほとんど症状はでませんが、風疹ウイルスに対する免疫を得ることができます。

- 風疹は、麻疹（はしか）などにくらべるとあまり重い病気ではないと聞きましたが、なぜ予防接種が必要なのですか？

答え：風疹は小児の場合通常あまり重くない病気ですが、妊婦、特に妊娠初期の女性が風疹にかかると、胎児が風疹ウイルスに感染し、難聴、心疾患、白内障、精神運動発達遅滞などをもった、いわゆる先天性風疹症候群児が出生する可能性があります。また、風疹にかかるとまれに脳炎、血小板減少性紫斑病、溶血性貧血などの軽視できない合併症をおこすことがあります。大人が感染した場合は発熱や発疹の期間が小児に比べて長く、関節痛がひどいことがあります、一週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

風疹の予防接種を行う第一の目的は、妊婦が風疹にかかることによって生まれてくる赤ちゃんが先天性風疹症候群の障害をもつことのないように、またそのような心配をしながら妊娠を続けることのないように、あらかじめ予防することです。予防接種は風疹の自然感

染による合併症の予防にもなり、大人が感染して重症になることも予防します。さらに、多くの人が予防接種をうけると、個人が風疹から守られるだけでなく、ほかの人に風疹をうつすことが少なくなり、社会全体が風疹から守られることとなります。

- 小児の場合、風疹の予防接種はいつ受ければよいか教えてください。

答え：

「標準的な接種年齢」は、現在生後12から36か月とされていますが、「生後12ヶ月から18ヶ月の間」に行うことを強くお勧めします。これにより接種前に感染する可能性を低くすることができます。理想的には、生後12か月で麻疹（はしか）の予防接種を行ない、その一か月後に風疹の予防接種を行うことです。

「定期接種の対象年齢」という言葉もありますが、これは「行政的に定期接種と扱いうるもっとも広い年齢の幅」のことで、風疹では生後12か月から90か月未満とされています。この間に接種をうけると、公費負担を受けることができ、通常無料または若干の自己負担のみで接種できます。

なお、風疹予防接種の記録は免疫の有無の確認に将来必要です。女性・男性ともに生涯大切に保管してください。

- 男性でも風疹の予防接種は必要なのですか。

答え：必要です。風疹は通常あまり重くない病気ですが、まれに脳炎、血小板減少性紫斑病などの軽視できない合併症をおこすことがあります。また、男の子が予防接種をうけず自然感染したときには、妊娠中のお母さんなどに、大きくなってからであれば妊娠中の配偶者（妻）あるいはパートナーなどにうつし、そして生まれてくる赤ちゃんが先天性風疹症候群をもつ可能性が生じます。風疹の合併症から身を守り、家族への感染を予防し、将来自分達の子どもを先天性風疹症候群から守るためにも、男の子も可能な限り早く風疹の予防接種をうけて下さい。

- 風疹の予防接種は以前は女子中学生のみを対象に行なわれていましたが、1995年からは、生後12か月から90か月未満の年齢の男女小児および中学生男女になりました。なぜこの変更が行われたのでしょうか。

答え：女子中学生のみへの予防接種では、世の中全体を風疹から守ることが十分にはできないと考えられるからです。男の子が予防接種をうけず自然感染したときには、妊娠中のお母さんなどに、大きくなってからであれば妊娠中の配偶者（妻）或いはパートナーなど

に風疹をうつす可能性があります。

風疹（の合併症）から身を守り、生まれてくる赤ちゃんを先天性風疹症候群から守るためにも、男女とも可能な限り早く風疹の予防接種をうけて下さい。このために、上述のようにスケジュールの変更が行なわれました。なお、中学生男女への定期接種は、接種対象変更の際に平成15年9月までの一時的な経過措置として行われていたもので、現在定期接種としての風疹ワクチンは生後12か月から90か月未満の年齢の男女小児のみが対象となっています。

- 風疹予防接種をうける費用は大体いくらくらいでしょうか。

答え：定期接種の年齢（生後12か月－90か月未満の子供）の場合は、多くの自治体では補助をすることになっており、原則的に無料または若干の自己負担で接種できるといってよいでしょう。それ以外の年齢の場合は自己負担になるので、接種を行なっている医療機関などに問い合わせてください。料金の設定は、それぞれの医療機関で異なります。

- 風疹のワクチンをうけると風疹にはかからないと考えてよいでしょうか。

答え：すべての薬が100%の効果をもつとは限らないように、ワクチンの効果も100%とはいえません。これまでの報告を総合すると、風疹ワクチン接種を受けた人に免疫ができる割合は95～99%と考えられています。

- 米国、韓国、オーストラリア、カナダ、ヨーロッパ諸国など、麻疹・風疹の予防接種を2回行なう国が少なくないとききました。これはなぜでしょうか。

答え：麻疹・風疹の予防接種は非常に有効な予防手段ですが、一度予防接種を受けた人に免疫がつかないことがあります。麻疹・風疹の予防接種を2回行なうことによって、これらの人にもほぼ確実に免疫を与えることができ、社会全体が麻疹・風疹に対して強い抵抗性を持つことができます。なお、MMRワクチン（麻しん・おたふくかぜ・風しん混合生ワクチン）を使用する国が増えています。

思春期・成人の予防接種

- 成人女性が風疹ワクチンを受ける場合に注意することがあると聞きました。それは何でしょうか。

答え：妊娠可能年齢の女性に風疹ワクチンを接種する場合には、妊娠していない時期（生理中またはその直後がより確実）にワクチン接種を行い、その後2ヶ月間の避妊が必要です。

風疹ワクチンは、大変安全なワクチンで、妊娠中に風疹ワクチンを接種されたため胎児に障害がでたという報告はこれまで世界的にもありませんが、その可能性は理論的にまったく否定されているというわけではありませので、上記の注意が必要です。

- 成人男性に予防接種を行なう必要はありますか？

答え：これまで風疹予防接種を受けたことがない場合は、なるべく早く予防接種をうけることをお勧めします。その理由は20代から40代の男性の4-5人に1人は風疹の免疫を持っていないと考えられるからです。大人が風疹にかかると、発熱や発疹の期間が子供に比べて長く、関節痛がひどいことがよくみられます。一週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。また、脳炎、血小板減少性紫斑病、溶血性貧血などの軽視できない合併症をまれにおこすことがあります。

また、男性が風疹にかかると、妊娠中の女性が近くにいた場合、風疹をうつし、その赤ちゃんが先天性風疹症候群となって生まれる可能性があります。

自分と家族、そして周りの人々を風疹とその合併症から守り、生まれてくる赤ちゃんを先天性風疹症候群から守るためにも、これまで風疹の予防接種を受けたことがない場合は、成人男性でも可能な限り早く接種をうけるようにして下さい。

- こどもの時に風疹にかかったと親にいられていますが、この場合予防接種をうける必要はありますか。

答え：これまで風疹の予防接種をうけたことがないのなら、なるべく早く予防接種をうけることをお勧めします。すでに風疹にかかったとの記憶のある人達に血液検査を行ったところ、約半分は記憶違い、または風疹に似た他の病気にかかっていたという調査結果もあります。風疹にかかったことが血液検査などで確かめられていない場合（風疹にかかった記憶だけの場合や、医療機関を受診していても症状だけからの診断で、診断が血液検査によって確認されていない場合など）は必ずしも信頼できません。

たとえあなたがこれまで風疹にかかっていたとしても、予防接種をうけることによって特

別な副反応がおこるなど、問題がおこることはありません。過去に風疹に感染していても、今、予防接種を行うと風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待されることもあるのでより安心です。

- これまで風疹の予防接種を受けたという記録がありません。この場合予防接種をうけるべきなのでしょうか。

答え：予防接種を受けたことが記録で確認されていない場合、男女ともなるべく早く接種することをお勧めします。血液検査で十分高い抗体価があることが確認された場合にはこの必要はありません。

たとえあなたがこれまで予防接種をうけていたとしても、または風疹にかかっていたとしても、再度予防接種をうけることによる特別な副反応がおこることはありません。過去に風疹の予防接種を受けていても、今予防接種を行うと風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待されることもあるのでより安心です。

- 風疹の予防接種の前には、まず風疹の抗体検査（風疹に対する免疫があるかどうかの検査）をうける必要があるとききましたが、2度も医療機関にゆくのは時間的に大変です。

答え：抗体検査を受け、十分高い抗体価があることが確認された場合には、予防接種を受ける必要がなくなります。しかし、抗体価が低い場合（一般に HI 抗体価が 16 以下の場合）は予防接種が必要になります。

時間のない場合は、予防接種の前の抗体検査は必ずしも必要ありません。風疹の感染または過去の風疹の予防接種によってすでに免疫を持っている方が再度接種を受けても、特別な副反応がおこるなどの問題はありません。そのような方の場合、予防接種を行うことで風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待されることもあります。

- 大人が予防接種をうけるにはどこに行けばよいのでしょうか。

答え：まずお近くの小児科医に相談することをお勧めします。最寄りの保健所や、地域の医師会に問い合わせるのもよいでしょう。

- 現在妊娠がわかったばかりの妊婦ですが、これまで風疹の予防接種をうけたことがありません。家族に風疹の予防接種を受けてもらうべきでしょうか。

答え：妊婦の家族内に、「ワクチン接種の記録」または「風疹の確実な罹患歴（症状のみからの診断ではなく、抗体検査などによって確認されたもの）」がない方がいる場合には、その方から妊婦に風疹をうつしてしまう可能性があります。これを防ぐために、家族の方は出来るだけ早く接種をうけることが勧められます。（なお、妊婦が風疹の予防接種をうけることはできません。）

- 家族に妊婦がいる場合、風疹ワクチン接種を受けてもよいでしょうか。接種をうけた者から妊婦に風疹ワクチンのウイルスがうつる可能性はありませんか。

答え：その心配はまずないと言ってよいでしょう。風疹ワクチン接種後3週間以内に、接種をうけた人ののど（咽頭）から一過性にワクチンウイルスの排泄が認められることがありますが、ワクチンウイルスが周囲の人に感染したとの確かな報告はこれまでにありません。むしろ、接種を受けていない家族が自然感染を受け、そこから妊婦が感染を受けるほうがリスクは高いと考えられます。（なお、妊婦自身は風疹の予防接種をうけることはできません。）

- 現在妊娠初期にあります。これまで風疹にかかったかどうかはわかりませんが、風疹予防接種の接種記録は持っています。妊娠中に風疹にかかる可能性はないと考えてよいでしょうか。

答え：予防接種をうけた記録があるので免疫をもっている可能性が高く（風疹ワクチンの効果は95－99%）、現在風疹にかかる可能性は極めて少ないと考えられます。しかし、予防接種を受けた人に免疫がつかないことがまれにあります。そのため風疹患者と密接な接触をすると、感染する可能性が完全には否定できません。念のために、妊娠初期に行なわれる風疹抗体価検査の結果をもとに、かかりつけの産婦人科医に相談してください。

- 妊娠初期の検査で風疹抗体価が十分高くないという結果でした。妊娠中に風疹感染を予防するにはどのような注意をしたらよいでしょうか。

妊娠中とくに妊娠初期は、風疹にかかっている可能性のある人との接触は可能な限り避けてください。また、風疹にかかっても無症状の人がいます。家族の中にワクチン接種記録、

または風疹の確実な罹患歴（抗体検査などによって確認されたもの）のない方がいる場合、その方は至急風疹ワクチンの接種をうけるようにしてください。詳しいことは、かかりつけの産婦人科医に相談してください。（なお、妊婦が風疹の予防接種をうけることはできません。）

予防接種の安全性

- 風疹予防接種の副反応にはどのようなものがありますか。

風疹ワクチンは、副反応の少ない非常に安全なワクチンの一つです。しかし、重大な副反応として、まれにショック、アナフィラキシー様症状、全身のじんましの報告があります。また、まれに（100万人接種あたり1－3人程度）急性血小板減少性紫斑病が報告されています。また、厚生労働省健康局結核感染症課による予防接種後副反応報告書集計報告書によると、風疹の予防接種をうけたあとに副反応の可能性が疑われて入院した例は、平成14年年度に接種を受けた約124万人に対して5件報告されています。

その他の副反応として、発疹、紅斑、掻痒、発熱、リンパ節の腫れ、または関節痛などをみることがあります。成人女性に接種した場合、子供に比して関節痛を訴える頻度が高いといわれています。

- 麻疹（はしか）と風疹の予防接種を同時に受けて問題ないでしょうか。

答え：問題ありません。国内では麻疹ワクチンと風疹ワクチンは現在（2004年9月現在）混合ワクチンではなく、別々になっていますが、このようにあらかじめ混合されていない2種類以上のワクチンでも、接種する医師の判断と接種をうける者の了承のもとに同時に接種することができます（平成15年11月28日健発第1128002号厚生労働省健康局長通知「予防接種（一類疾病）実施要領」第一の18の（2））。

世界的には、可能な場合は複数の予防接種を同時に接種することが推奨されています。麻疹と風疹のワクチンを同時接種することには、1）別々に接種するための待ち時間がなくなり、早く免疫があたえられ、2）何度も接種をうけに行く必要がなくなるという大きな利点があります。